

医師 支える 疲弊 医師



避難所を巡回するAMD Aから派遣された医師(中央)と看護師—24日午前10時3分、岩手県釜石市の双葉小学校、福留庸友撮影

全国之力 送り込むために

23日夜、記者は岩手県釜石市を訪れた。国際医療支援団体「AMD A」(木部・岡山市)の松井治晴医師(31)が避難所を回っていた。勤めていた病院から、週間の休暇をもらって、19日に現地入り。市内3カ所の避難所を見守る。「今はまだ、医療のプロが支えるべき段階だ」という。

400人以上の被災者が身を寄せる釜石中学校でAMD Aの活動を支えるのが、地元看護師、三浦麻美さん(44)だ。被災し、娘と2人で避難してきた。数日後に看護を買って出た。

避難所の運営にあたるのは市職員の。人。栃内宏文さん(44)は市の統計係長、松下隆一さん(41)は資産税係主査だ。松下さんは義母を亡くしたが、22日に一度家に戻っただけという。刻々とストレスが増す避難所。その運営を支える自治体職員と交代し、少しでも休ませてあげよう。「行政ボランティア」も必要だ。

新潟県柏崎市社会福祉協議会の大家貴光子さん(39)は、外部からのボランティアの受け入れを準備する先遣隊として18日、仲間とともに釜石入りした。地元の「被災ボランティア」が物資の配送や、避難所の清掃をするお手伝いをしながら、全国の「民力」が繰出で動き出せるよう準備を続ける。

被災地の外にいても

今はまだ混乱期だ。被災地だけでなく、できることはある。被災地の外に住む私たちが、少しでも物資やガソリンを節約し、バケツリレーのように真っ先に被災地に送り込もう。

(編集委員・外岡秀俊)